

わたくしに烏柄杓はまかせておいて

晴子

これは遺句集（第七句集）の『平日』にある句である。
なぜカラスビシヤクは、飯島晴子によつて「まかせておいて」とされるのだらうか。まづはカラスビシヤクを知らなければ、と思つて『新日本大歳時記』といふカラーのやつを開くと、その例句として、

烏柄杓干本束にして老いむ 晴子

が引かれてゐるではないか。もちろんカラスビシヤクの解説も写真も出てゐる。「六月頃、一〇〇―一五センチの花茎を出し、上端に緑色の仏焔苞に包まれた肉穂花序を立てる」とあるが、写真は、どうもあまり明瞭ではない。この二つの句の比較では、『平日』の「まかせておいて」の方が、今のわたしの好みには合ふ。

飯島さんは、亡くなられた時に、文章を書いて自分たちの雑誌「未来」にのせた。忘れがたい俳人である。かかはりは深くなくお会ひしたのも二、三回だらう。「鷹」の、信頼するに足る俳人と思つてゐた。『朱田』からあと毎回、句集をいただいて、幾度か、その句のよろしき所以を書いた。

自分に対してきびしい女人だと思つてゐた。論理づくめといふのは違ふが 知 の匂ひのする文章を書いて居られた。一度だけ、パネルディスプレイのパンナーとして同席したことがある。その時の発言にも、さういふ 知 の匂ひ、知 の力を感じた。

百合鷗少年をさし出しにゆく

鶯に蔵をつめたくしておかむ

月光の象番にならぬかといふ

恋ともちがふ紅葉の岸をともにして

男らの汚れるまへの祭足袋

かういふ句を引いてみたくなりますよ、飯島さん。そんな風に語りかけてみたくなるやうな人であつた。百合鷗に

対して、「少年をさし出しにゆく」とはなんだらう。「さし出しにゆく」には、人生苛酷の感じがあつて、わたしは共感するのである。「月光の象番」なのか、「月光」が「象番」にならぬかといふのか、これは、わたしは勝手に、「月光」といふ存在がやつて来て、「おてまへは、象番におなりなさいよ」と勧誘してゐるやうに受けとつておもしろがつてゐた。

なににしても、飯島さんが亡くなって居られるのでは、はかない話だが、それでも歳時記などひきながら、カラスビシヤクの句とつき合つてゐると、たのしく慰められる。カラスビシヤクではなく、「烏柄杓」と書かねばならない。さういふ句である。これは植物の名であつて、しかもそこに、烏が棲んでゐる。烏が、柄杓に使ひさうな肉穂花の、その外の総苞である。あれは、水は汲めまいが、烏ならあれで汲みさうだ。ほんたうは、カラスビシヤクは雑草として庭や畑に生えて来るので、この草の駆除は、わたしにまかせておいてよ、といつてゐるみたいでもある。この柄杓で水を汲むのは、常人にはできないだらうから、このわたしめにおまかせ下さいと申し出られたやうな気にもなる。

『平口』を、ふたたび読んでゐて、

袖子と袖子息をころしてゐるのかも
といふ句に目をとめた。

正月や*しいらの男方女方置く
といふ句もある。*しいらは、大魚のやうである。名のひびきに惹かれるが、見たことのない魚である。飯島さんは「男方は魚を割いて背骨の付いた側、他方が女方」と注記して蒙を啓いてくれてゐる。

袖子同士もいきをころして相対してゐるのかも知れないといふ。*しいらの身にさへ、男と女を別けてかんがへるものともものが、自然にとけ合つて調和する姿といふよりあるのだ、といふ認識が、とりわけ、この人が男をとりあげた句に感じてゐた。そして、さういふ分別をされること

が、わたしにとつては不快なことではなく、むしろ納得がいくことだった。

柿の棹あれにもこつがあるのかも

ほか生りの柿の下にて亡国論

「柿の棹」。さういふ道具があつたなあと思ひ出して、おもはずうれしくなつた。「柿の棹」も、もう、ほとんど見かけなくなり、「亡国論」ばかりはやる世の中になつた。そして、そのうちに隠れ住みたき鴛鴦の沼と言ひながら、鴛鴦の沼ならぬ彼岸へ、旅立つて行つてしまはれた。